

先週の新年礼拝のメッセージ(2022年1月2日) ベン牧師

「キリストに結ばれている者として」 ローマ人への手紙 8:1

「キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。」

今日開かせて頂くみことばは、2022年の年間聖句として掲げたものです。

信仰について私たち側から語ると「私はイエス様を信じている」と、私が主体となつての行いのような表現をします。もちろんそれが間違っているわけではありません。しかし、本来私たちが救われたのは、自分の努力や信仰の力で救われたわけではありません。神様の方から、イエス様を信じるなら罪赦され、救われるという福音をいただいたので救われたのです。神様が私を選び、信仰へと導いて下さったということを忘れてはなりません。それが今日のみことば「キリスト・イエスに結ばれる」ということなのです。



マタイ 11:28には、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしのくびきを負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」とあります。くびきとは、牛2頭の首を横に繋いで、同じ方向に二頭が進むようにして農耕させた道具です。必然的に二頭はバラバラには進めず、同じ方向に進みます。イエス様のくびきを負うとは、イエス様が行かれる方向に私も離れないで、共に歩むということです。私たちがキリストに結ばれている姿がまさにそれなのです。自分の努力や頑張りではなく、イエス様が行くべき道を導いてくださるということなのです。

私たちは、自分の人生のさまざまな重荷を1人で追ってきました。しかし、私の人生にイエス様をお迎えするなら、イエス様が一緒に私の重荷を負ってくださいます。人生の重荷が全くなくなるわけではありません。しかし力強いイエス様が共に負ってくださいるなら、私の荷は軽くなるのです。

パウロという人もそうでした。ローマ7章で、彼は自分の罪の問題について苦しんでいました。「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。」(7:15)と言っている通りです。しかし彼は、そんな惨めな私だけけれど、イエス様に結ばれているなら、決して罪に定められることはない、8章の言葉へと繋がっていくのです。これこそがクリスチャンの信仰の基本ではないでしょうか。

クリスチャンになったからといっても、弱さや欠けもあります。罪を犯すこともあるでしょう。実際にヨハネの手紙1では、「自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にありません。」と、すべての人に罪があると記しています。

それなのにとつと変ですが、聖書はキリストを信じる者に聖くあるように求めます。罪を犯す弱さをもっている私と聖くあるべき私、ここに大きな矛盾が生じるわけです。そして時として「ああ、自分はダメだ」と失望してしまうのです。しかし、先ほど語ったように、イエス様に結ばれるということは、弱さや欠けがあってもいいのです。そして、聖くあるということは、ただ信仰のみで受け止めるべきものなのです。

では、もう私は何をしても赦され、聖くされるのか、という質問が出てきます。そういう時、私は日本語の「恩」という言葉を例に出して話します。神様に愛され、赦され、祝福されているという、この「恩」に報いたいと思うのは、義務でも規則でもありません。恩を受けた人が、自分から相手に何かをして恩返ししたいと思うのは人間の常です。逆にそれをしないことは、恩知らずと言われます。私たちは恩知らずのクリスチャンになりたくはありません。

聖書に〇〇しなさい、〇〇するなと命令されているから従うのか、神様がこんな私を愛してくださっているなら私も何か神様のためにしたいと思うのか、同じことをしても根本が全く違います。私たちクリスチャンは本来、すべてのものから解放されて自由なのです。(ガラテヤ 5:1) 神に仕えるのも仕えないのも自由、信仰によって歩むかどうかも自由です。でも、私たちがキリストに結ばれているなら、自然にその行動は導き出されていくはずなのです。

イエス様が私のために十字架で命まで捨ててくださったことによって、私は弱く欠けがあっても、罪に定められることは決してない、この恵みを「アーメン感謝します」と受け取るだけなのです。

どんなに世の中が混沌としていても、キリストに結ばれている恵みと、その恩に報いたいという感謝をもって歩むなら、2022年は「喜び、感謝、希望」の年となるでしょう。みことばに立って前進していこうではありませんか。

